The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	学生からの感想
Author(s)	清川, 博貴; 山田, 直敬
Citation	臨床哲学のメチエ. 2006, 15, p. 30-33
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9540
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「哲学講座」に寄せられた洛星高校からの感想

今回のメチエには、「哲学入門」に参加した学生のみなさん、協力してくださった洛星高校の先生がたからも感想をいただくことができました。・・・・・

学生からの感想

清川　博貴君

２００５年の４月から１年弱の間、ほんの１０回ほどでしたが「哲学入門」の授業に参加した１人として、この授業に対する感想や意見等、駄文ですが書いていきたいと思います。

全授業が終わってみて、これまでの授業が盛り上がったか、「対話」が活発に行われたかといったことを考えてみると、私はそれほど意見のやりとりができなかったように思います。誰も話さず沈黙が続いて結局論を進められずに終わってしまう回や、あまり話がかみ合わずに終わってしまう回がかなりありました。このようになってしまった原因ということに話題を絞って授業を振り返ってみると、まず自分たち参加者が「対話」というものに慣れていなかったように思われます。授業の中でも全員が発言を遠慮してしまっているような感じでその雰囲気を誰も破ることができずに終わってしまうパターンが目立ちました。参加者の中で普段から特によく話す親しい人が互いに少なかったことが一因としてあるかもしれません。ですがそれ以上に、発言時に手を挙げるのが何か決まりのようになってしまったり、周りの参加者というよりも先生１人に意見を述べているようになってしまったりと、自分から「対話」を自由にできないようにしてしまっていた気がするのが残念であり、反省すべきだと思っています。

また、今回の授業の中でなかなかうまくいかず、話がかみ合わなくなる原因となってしまったことが、自分の考えをうまく人に伝えることだったと思います。言葉の使い方には随分と悩むことが多かったように思います。ある言葉について持つイメージとか、その言葉を聞いて思い浮かべるものとかいったものは人それぞれで変わります。抽象的な言葉だと尚更です。それゆえ、発言の中で出てきた一つの言葉が原因で「対話」が大きく脱線してしまうことがありました。こういったことに阻害されて自分をはじめ多くの人が自分の考えを他の参加者に伝えられなかったのではないでしょうか。

最後に参加者の中のある友人が「他の人の

発言がどれも予想できうることばかりであまり対話が面白くなかった」という意見について気になったので私なりの考えを書いておくと、私はこの考えには疑問を感じています。ある１つの事柄について各人が考えることはよっぽど個性のある人でない限りいくつかの決まったグループに分けることができるでしょう。そこから個々の発言について「発言の中のこれは詳しくはどういうこと？」とか「じゃあこの場合は？」といったツッコミを入れていくことでやっと人による意見の違いが浮き彫りになってくるのではないでしょうか。そうした努力をせずに自分とは違う考えを求めるのはあまり納得のいくことでは無いように思います。

次に授業のスタイルについて振り返ってみたいと思います。特に「対話」がうまく進まなかった回について授業のスタイルがどのようなものだったかを考えると、最初に抽象的な言葉をどんと出してきてそれについて考察していくというものが多かったと思います。授業を受けていてこのスタイルには何かやりにくさを感じました。やはり先ほど書いたように、最初に抽象的な言葉を出されると、人によってその言葉について持つイメージが違うため、その溝を埋めるのにかなりの時間を費やしてしまうと思うのです。いわばスタート地点が人によって違うこの状態では、70 分という短い授業時間内に論をまとめていくのは難しいのではないでしょうか。

一方で「ソクラテスの対話ゲーム」のスタイルで進められた授業は「対話」を進めやすかったように思います。抽象的な言葉からではなく、簡単な質問と答えから論を進めていくことで参加者の「対話」のベクトルがあまりバラバラになることなくあることについて集中して「対話」が進められたように思います。また、３人１組という少人数で「対話」を始めるスタイルも遠慮することなく自分の言いたいことを言えるという点で良かったように思います。また３人での「対話」である程度考えをまとめておくことで、全体での「対話」もスムーズに進められたのではないでしょうか。

「笑い」をテーマにした回も同様の理由で「対話」がうまく進んだように思います。漫才のビデオを見てどの部分が面白かったかについて３人１組で話していくというスタイルでしたが、この話がとても面白く盛り上がりました。そのため意見も多く出て、後の全員での「対話」も進めやすかったです。

最後になりましたが今回、「哲学」ができたとまでは言えませんが、たくさんの先生の下でさまざまなテーマについて「対話」をしていくという、とても貴重な経験をすることができてとても良かったと思っています。

授業に来ていただいたすべての先生方にこの場を借りてお礼申し上げます。

（きよかわひろき）

山田　直敬君

「これが哲学なんだなぁ」と初めての授業を終えて感じました。僕がこの講座を選択したきっかけは、学校での倫理の授業や本などで哲学に興味を持って、もっと哲学に触れたいと思っていたからでした。「哲学」というタイトルがついているくらいだからこれから一体どんな講義が始まるんだろう、という期待をもって僕は講座の開始を待っていました。ですが、講座が始まるなりその内容は僕が想像していたものとはまったく違うものだと気付かされました。期待はいい意味で裏切られました。講座は講義ではなく「対話」を中心にして進められ、先生が問題提起を短時間のうちに行い、生徒が残りの時間意見を交換していくという形式でした。そのとき受けた初めての講座のテーマは「死ぬ権利はあるか」というものでした。はじめはこの慣れない問いに戸惑いましたが、意見が出るようになるとどんどん対話が進んでいきました。時折自分には考えもつかないような視点からの意見が出ると刺激になり、うれしく思いました。対話が軌道にのってきたときに時間の制約によってこの講座が終わったので、問題は解決されずに悔しい思いをしたのですが、みんなの持つそれぞれの考えを交換することで自分の持つ知が再構成されていくのはとても意義あることでした。そして何よりも、友達と普段とは違う「対話」を楽しめて、充実感を得ることができました。

対話とはまさに文字通り、向かい合って話し合うことであり、当然毎日誰かとするはずのことでした。ですが自分をよく振り返ってみると僕は思えばそれまで誰かと真剣に「対話」をしたことがあまり多くはなかったような気がします。特に哲学についてはです。確かに授業を受けたり本を読むことで知識は増えます。しかし得た知識やそのときに感じた思いを発信する機会を今まで持てていなかったのです。そのため、対話によるこの哲学の講座は回を重ねるごとに僕にとって考えを深化させる恰好の場所になっていきました。

数回にわたる講座の中で最も印象的だったのは、対話篇の疑似体験をするゲームです。これは３人一組になってそれぞれがソクラテス、若者、書記（プラトン）の役を演じて対話を進めていくというもので、与えられた問題に対するいくつかのあらかじめ用意された解答例のうちから若者役が一つを選んで、ソクラテス役はそれについて若者役に質問を繰り返していきます。この質問と返答をどちらかできなくなるまで繰り返します。このときのテーマは「人間と動物の違いは何か」でした。僕はそのとき若者役をやったのですが、しばらく問答を続けると返答に詰まっていき、結果僕は負けてしまいました。さまざまな質問がなされましたが、その中で返答に困ったのは、「あなたの言う『動物』（あ

るいは『人間』）とは何か」とか「なぜ人間を食べてはいけないのか」という自分が常識だと思っていることへの説明を迫るものです。常識に慣れると思考はストップしてしまうとはよく聞くような言葉ですが、まさにそれを身をもって感じました。苦し紛れにあることを否定しても、それに当てはまらない例外的なものや必ずしもそうとは言い切れないものが次々に出てきて余計に墓穴を掘ることもありました。自分の理解の浅さを痛感しました。この回で「言葉の定義を吟味してから話す」という教訓を得ました。また抽象的な言い方をする際には、言葉の定義に加えてそれに具体が伴うかどうかも吟味する必要があることも感じました。実はこの頃からやっとどうやったら相手にわかりやすく伝えることができるかを意識しながら話すようになりました。また、このことがヒントになって相手がどんなことを言っているのかを以前よりきちんと聞き入れることができるようになったと思います。まずは言葉の意味をよく知り、確認することが対話において非常に大切なことだと覚えました。

「対話」を一貫したテーマとしていたこの講座全体において僕が学んだことは、自分の考えを分かりやすく人に伝えることの難しさと、それが実現できたときの喜びです。また、相手の考えを丁寧に聞き入れることも学びました。決して独りよがりになることのない対話には、問題に取り組む友人たちの真摯な姿勢が感じられて、毎週講座が終わるたびにもっと話さずにはいられない気持ちになりました。対話の魅力はこのようなものなのかもしれません。もっと話さずにはいられない。そんなテーマを与えてくれるのが哲学ではないでしょうか。

（やまだなおたか）